
忘れられた石像

千鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れられた石像

【Nコード】

N3600A

【作者名】

千鶴

【あらすじ】

たった一人の人の記憶にさえ、残ることは出来なかった。

「今晚は、王女様。」

月が美しく輝く夜、彼はいつものように窓辺に佇む王女に話し掛けた。

「今晚は、ルーク。今夜はとても月が綺麗ね。」

彼女も、小さく微笑みながら返事をした。

「ええ。こんな夜は久しぶりですね。」

ルークと呼ばれたのは、高い柱の上に建てられた石像だった。

「…どうしたの？今日の貴方は、何だかとても寂しそう。」

柱の上に立つ、その醜い怪物に、美しい王女は優しく話し掛けた。

「…私は貴女が不憫で仕方が無いのですよ。世界は貴女が想像している以上に広く、美しいものなのです。しかし貴女は、その窓からの、四角に切り取られた世界しか見たことが無い。この国の誰よりも恵まれた家系に生まれながら、誰よりも狭い世界を生きる貴女が、とても不憫でならないのです。」

幻想的にエコーがかかった声に、強い哀れみを込めてルークは言った。

王女はただそれを黙って聞いている。

「貴女がまだ幼い頃、よく城を抜け出して遊んでいましたね。森の中でリスを探してみたり、小川に入ってびしょ濡れになったり…私と一緒に、夜通し星を眺めていたこともありましたね。覚えていますか？」

「そうね…そうだったかしら。」

「忘れてしまったのですね。」

微かに落胆の色を見せ、ルークは言った。

「いえ、忘れてしまうのも無理はありませんね。もう二十年も昔の話ですから。」

「ごめんなさい。」

申し訳なさそうに俯く王女に、ルークは優しく微笑みながら言う。

「いいえ。さあ、今夜はもうおやすみなさい。あまり長く話していたのでは、衛兵に気付かれてしまう。」

「ええ…おやすみなさいルーク。」

そう言つて王女は静かに窓を閉めた。

「忘れてしまった…。」

冷たい月明かりの下で、ルークは独り、哀しそくに空を見つめていた。

「今夜は、やけに冷える夜だ…」

そう呟くと、ルークはただの石像に戻った。

広い夜の中に、月明かりに照らされた石像の背中が、白く浮かび上がっていた。

もう二度と、ルークが口を開くことは無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3600a/>

忘れられた石像

2011年10月3日01時22分発行